

崇武館
館長 飛鳥宗一郎
(宗雄)

先人の言葉から学ぶ（その5）

武の道は 和の道究め 和を求む道

出典・・・大塚博紀の道歌（その2）

4 閑話休題

本題に入る前に、今月は大塚先生にまつわる話題を幾つか述べようと思う。文中、様々な先達の話しに触れるが、敬称を略させていただく。

(1) 和道会東北地区と大会の開始

和道会東北地区本部の結成は昭和35年（1960年）6月で、初代本部長は鈴木立夫さん（故人）といって東京農業大学空手部草創期の主将を務めた方、農地改革前は宮城県南郷町などで所有した田畑500町歩という大地主で、左の掌に貫通弾の跡を残す傷痕軍人であった。発足時の理事は確か6名だったと思うが、私も理事の一人に就任した。結成会議では、規約の承認と併せて東北大会を実施しようと決議された。

最初の大会は昭和35年10月、盛岡市で行われた。種目は男子団体戦と個人戦だけで、団体戦は山形大学が、個人戦では武田公（山形大理4年）が優勝した。

その時、東北地方における和道流空手の普及振興を図るため、春秋2回の開催がよいのではと話題になり、春は仙台市に固定することにした。

翌年5月28日、仙台市で第2回大会が開催された。丁度その日は、私在家内と結婚式を挙げた日で、住んでいた最上郡最上町の羽前向町駅から、身内の見送りを受けて午後4時過ぎの汽車（電車でない）に乗り新婚旅行に出立した。

最初の泊まり先は岩手県花巻温泉だったので、7時頃に小牛田駅で東北本線に乗り換え、満席なので立っていたところ、大会帰りの岩手大学と岩手医科大学の学生が私を見つけ、席を譲られやっと着座することができたのである。

花巻から青森県十和田湖や八幡平、秋田県大湯温泉など4泊5日の旅であったが、時代背景からして豪華版だったのではと思っている。郷里の向町駅を発つ場面など写

真は何枚か残っているが、恥ずかしくてとてもお目につけられない。25歳の時であった。

(2) 「空手使い」の話

第3回大会は昭和36年11月、山形大学が主管し鶴岡市で開催することになった。春秋2回開催の始まりである。

この年間2回の開催は昭和52年（1977年）まで続いたが、宮城県の負担も大きいうえに、初期の目的を達成したとの判断から、翌53年からは年1回開催とした。

今年6月24日、山形県本部が主管し「第70回記念大会」を山辺町民体育館で開催する。70回と回数を重ねる大会は、全国的にも例を見ないのでと思う。

第3回大会を鶴岡市で設定したのは、当時、明治生命鶴岡支社に勤務する私の前の主将・武田恒哉先輩（昭和31年卒業）が、準備万端を担当すると誘致を希望されたからで、武田先輩に万端お任せとなった。

栄誉なことに大塚先生からお越しいただいての開催であったが、豪華とは言い難い古びた和風旅館が先生と私たちの宿舎であった。

前日の夕食は大塚先生を囲み、山形大OB数人が席をともにしたその時である。突然、武田先輩から『飛鳥は、俺は「空手使い」だと日頃言っている。確かにそんな雰囲気練習を重ね、学生たちに指導しているように思う』と。

私たちは、日頃大塚先生を心から尊敬し信頼しながら、生意気盛り20代の若造たちである。何でも思ったことを先生の前で言っただいような勝手気ままな親しさを抱き、「親しき仲にも礼儀あり」を勘違いしていたように思う。今にして思えば偉大な先生に対して不遜な言動が多くあったこと後悔せざるを得ない。「後悔先に立たず」の言葉どおりである。

それを聞いた先生は、『飛鳥君は「空手使い」か。「忍術使い」という言葉は聞いたことあるが、「空手使い」は聞いたことないね』と、いつもと変わらない柔和なお顔でいわれた後、『今、「忍術使い」といったが、空手のことを空手術という場合もある。かつては柔道を柔術、剣道を剣術、武道も武術と呼んでいたし、武術の長けた人は武芸者といった。馬術といって馬道と呼ばないものだってある。また、術を上手に用いる人を「使い手」ともいっていた。本来は、「術」も「道」も「みち」「道理」の意味であるから同義語と考えていいが、明治時代初期に嘉納治五郎先生が柔術を柔道と呼び換えてから、術より道の方が上位の感を抱くような風潮がある。それは、武の道を修める者にとって武道精神が先で技法が後位になると勘違いするのと同じで、考え違いと言わざるを得ない。ただ、明治維新後、生活に困った一部武芸者たちが、武術を興業化し見世物にした例があって、その人たちを「剣術使い」とか「やわら使い」と蔑んだ呼び方をしたことから、「空手使い」はあまり適切とはいえないやうに思う。飛鳥君も早く「空手使い」から抜け出して、周囲の人たちから武道家といわれるようになるまで励みなさい』と諭された。

『イヤー、先生。申し訳ありませんでした。心得違いをしていました。今後は言葉

つかいに十分注意します』と平身低頭したのであった。

(3) 「飛鳥流」の始まり

東北地区の昇段審査会で、大塚先生から陪席を許され審査員として加えていただくようになるのは四段となった昭和36年（1961年）からと思う。

正規に審査員、あるいは師範の呼称を使用できたのは昭和39年11月、29歳のとき五段を許されてからとなる。当時は、四大流派全てが最高段位が五段制であった。

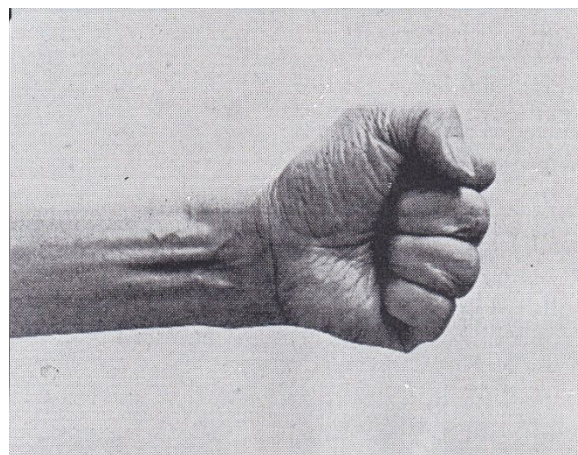
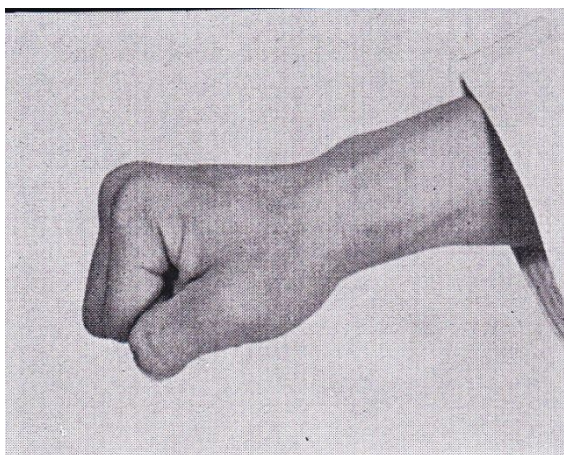
また、太平洋戦争終戦前は、それぞれの武道種目において、実力で取得可能な価値ある段位は五段と認識されていたので、五段を最高とする考えは妥当なところと思う。

空手道界において、各流派ともに六段以上の高段位を允許するようになるのは、昭和42年度以降となる。余談になるが、私の場合、四段から七段まで推薦段位であった。

又しても私の馬鹿が発露したのは、28歳頃の春期審査会の前夜だったかと思うが、大塚先生と夕会をともにしたときである。詳細には思い出せないが、次のようなことをお尋ねしたように思う。

ア 正拳の握り方ですが、私は「巻藁」を突いたり試割りなどで試したところ、親指は、掌に巻き込んだ他の指を意識し、人差し指と中指の二指を上から折り曲げて掛かるように強く握るのが良いように思うのですがいかがでしょうか。

註：大塚先生の正拳の握りは、親指は人差し指一本にのみ斜め側方から掛け、親指側と小指側から拳の中央に締めるようにしておられた。



大塚先生の正拳の写真。先生の著書「空手道」（第一巻）31頁から引用。

イ 前屈立ちの場合ですが、和道流の立ち方は腰が高いのではと他流派からいわれませんが、もう少し足幅を広げて腰を落とす方法はいかかなのでしょうか。

ウ 「上段受け」ですが、跳ね上げながら斜め後方向に流すことになりませんが、相手の突きを前方向でがっちり受け止める方法はいけないのでしょうか。

こんな質問は実に愚拙な、しかも他の流派の特徴を並べ立てている感すらある。

先月述べたように、私が最初に出会った空手は、拓殖大学空手部（松濤館流）の演武であった。しっかり腰を据え足幅を広げて踏ん張り、力感に溢れた突き、蹴り、受けの様子は、さも誇らしげに力感を示して行動するタイプである。

そんな印象が頭の中にこびり着いていた私は、ひたすら「巻藁」を突き拳ダコを作り、「試割り」が大好き、これが空手だと言わんばかりに演武会でバツバツと立ち回りするのに快感を覚えていた時代である。その晩は、和道流空手とは全く反対のことを質問したわけで、先生も開いた口が塞がらなかったのではと思う。

こんな愚問に対し先ず先生がいわれたのは、『その質問の主旨から、その考え方の基は、あえていえば「飛鳥流」だな』と。

すっかり私の心底を見抜かれていたのは間違いないとしても、流石は大塚先生のお答えであった。『飛鳥君、それは・・・流だよ』と一概に否定しなかったのである。

その上で、『瓦や板は動かない物体、拳を鍛えてそれを打つても意味はない。人間が相手なら常に身体と心の変化に対応しなければならない。力任せの行動は自在性を失うばかりである。例えば武道を知らない人間でも、必死になって抵抗し人を襲えば異常な力を発揮し手に負えないことだってある。予期しない場面に出会ったとき、咄嗟に対処できるのが武道である。私は「空手術の研究」というガリ版刷りの本を作ったのは、和道流空手道の一部を伝え理解してほしかったからで、しかし本当は書物で真意は伝わるものではない。技法は心術であって、生涯修業によっても達成できないかもしれない。明日の審査会で指導するから、よく見て学びなさい』などと、私の心の揺らぎを正すような、教え諭す話をされたのである。

「飛鳥流」と呼ばれた私は忸怩たる思いとともに、自分の考えが大塚先生の教える空手ではなかったことを反省する素直さを持っていた。その後、一層大塚先生の空手が大好きになり、生涯かけて学び貫こうという決意を新たにしたのであった。

当然、審査員を務める東北地区の指導者達も同席していたわけで、翌日は皆から『そうか。やはり飛鳥流だったか』とはやし立てられた。後々になっても私が持論を述べると、「飛鳥流」だといわれる基は自分から作ったことになる。

(4) 大塚先生の体形

先生の体形であるが、ご自分では身長は五尺五寸（166cm）だと言われていた。明治25年（1892年）6月の生まれであるから、その頃の男子の平均身長は155cm程度と推定されているため、かなり高い部類になる。今の男子平均が172cm弱、女子が160cmとは大きく違う時代である。

私が最初に指導を受けたのは、先生が64歳の時であったと先月書いたが、一見中肉中背ながら、がっしりした上体に厚い胸、柔らかい掌と頗る太い五本指が印象に残っている。これは幼少時から柔術や剣術を熱心に励まれたせいかと思う。

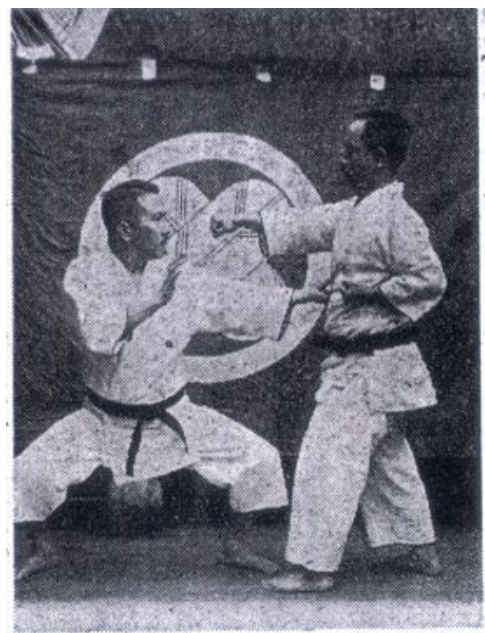
30歳を過ぎてからこんな質問したことがある。『先生は幼少時から柔術を修業され、

最高に体重があった時どの位でしたか』と。先生は十六貫目だといわれた。それなら丁度 60 kgとなるので、例えば昭和 25 年（1950 年）でさえ成人男子の平均体重は 48.2 kgとなるので、これまた立派な体格だったといえる。

月刊「空手道」という雑誌があって、今発売の 7 月号はカラー特集で「和道流開祖・大塚博紀生誕 120 年記念特別企画」となっている。この中で、身長五尺六寸（170 cm）、体重は二十貫目（75 kg）と記されているが、私の身長は 174 cmであった（今は 2 cmほど縮んだ）ことと考え合わせれば、直接先生から聞いた数値の方が正しいように思う。



月刊「空手道」24 年 7 月号の表紙



自然流の主空者小西康裕氏（左）
と糸東流の麻文仁長順氏

摩文仁賢和と小西康裕

大塚先生は、船越義珍から最初に空手の手ほどき受け、その後は摩文仁賢和（1889～1952 年、糸東流開祖）、本部朝基（1870～1944 年、日本傳流兵法本部拳法開祖）に師事し、更に小西康裕（1891～1983 年、神道自然流開祖）との交流を続ける中から、在来武道の考えを取り入れた組手術への発展に寄与し、今日の組手試合に直に繋がる貢献は、先見の明からと思えば尊い存在であったこと間違いない。

ここで、大塚先生の正拳の握り方の特徴に戻るが、「巻藁」鍛錬を必須とした沖縄伝来の握り方との違いは、先生の五本指が常人に比べて太かったことからの工夫と、求めた技法・理法の特徴から至った結果でなかったかと思われる。

「巻藁」鍛錬はほとんど必要としない空手家（例えば、林 輝夫）もいれば、各使用部位は必ず当ててみなければ分からないと主張する空手家（例えば、金城 裕）など、人それぞれであると思う。

(5) 小指の使い方

先生から教わった拳の使い方の説明では、『我が国の武道は、柔道で相手の襟を取る時も、剣道で真剣や竹刀を握る時も、相撲で回し取ったり押したりする時も、全て小指の使い方が最も重要視される。空手の場合は、拳といっても正拳もあればコーサー（人差し拳の使い方で3種ある）、鉄槌、裏拳など様々であり、開けば手刀や貫手、弧拳、背刀の他にも多様である。いかなる場合も小指を締める力の自在性が大切であるとともに、正拳の場合なら親指と小指の両側から拳の中央に力を寄せるよう握るのが好ましい。そして、必要以外は拳の中に力を込めないことであって、我が国古来の「当身術」の場合も、拳の中に力は籠らないのである。『飛鳥君のように、掌に「握り胼胝」ができてはいけな』といわれたこともある。

確かに、先生の掌は厚みがあっても柔らかくすべすべしていた。柔術と「当身術」で鍛えた指や拳は、特に巻藁鍛錬などは必要としない、古来より伝わる日本武道の理に適った使い方を編み出したのであろう。今や、私も含め大塚先生の正拳の握り方は、本当の意味で継承されていないのではないかと思う。

(6) 忍者・藤田西湖のこと

指の太さでは、最後の忍者といわれた藤田西湖（1899～1966年）を思い出す。藤田は、甲賀流忍術第十四世を称し、忍術以外に南蛮殺倒流拳法、大円流杖術、心月流手裏剣、一伝流捕手術、その他にもほとんどの武術を継承していた。

藤田は、太平洋戦争中は陸軍中野学校（諜報や防諜、宣伝など秘密戦に関する教育や訓練を目的として設立された大日本帝国陸軍の軍学校。かつての所在地が東京都中野区にあったことから、校名の由来となった）で南蛮殺倒流拳法を指導している。



藤田 西湖

この南蛮殺倒流拳法とは、藤田によれば日本拳法から出たものと作家・坂口安吾との対談（昭和26年、オール読物掲載）で語っている。

ところが、私は藤田西湖に一度だけ直接会い、宴席を共にしている。それは、昭和30年大学2年の時、7月初旬のことであった。

山形大学空手道部に「糸東流東北支部結成記念、福島大学空手部発足記念大演武会」への招待文書が届き、当時の武田恒哉主将（文理4年）を筆頭に、私と安孫子、梶山、安藤の2年生部員4名が参加した。当時東北地区の大学で空手の部活動があったのは、昭和13年創部の秋田大学をはじめ、戦後に開始した東北学院大学、日本大学第二工学部（今の日本大学工学部）と山形大学だけで、いずれも招待を受けたのであった。



岩田 万蔵

その演武会には、甲賀流忍術第十四世・藤田西湖、南蛮殺倒流拳法第四世・岩田万蔵（日本大学第二工学部空手部師範でもあった）が出演と、大看板に書いてあった。

岩田は姿を見せなかったが、藤田は忍術と南蛮殺倒流の触りを説明され、「忍者は天井の棧を手足の指で掴んで逆さに歩く」、「遠く離れたところの透視ができる」、「猫と同じで頭の幅さえあればどんなところも通り抜けられる」、「どんな職業の人にも扮して化けることできる」などの話が記憶に残っている。山大は他大学と一緒に演武に参加し、5人でクーシャンクーを演じ、私は正拳で瓦を13枚割った。

終わって一同で夕食会をともにした時のこと、正面席に坐す藤田に敬意を表しお酌に参加したところ、その指は頗る太く、しかも先端部が異様に膨れ上がる発達を呈しており、足袋を履いていたので足指は確認できなかったが、これなら天井を逆さに這って歩きけるはずだと信じて疑わなかった。その後、宴席の部屋に屏風を持ってこさせて裏に入り、風に揺らぐ木の葉の音、虫や鳥の鳴き声、遠くで話す人声、小川のせせらぎ、足音など、本物と変わらない音声を聞かされたときは、江戸家猫八の物真似芸など子供だましでないかと思った。

(5) 大塚先生の談話から

昭和52年3月、(株)創造から(財)全日本空手道連盟や全日本学生空手道連盟など、公式に活動する団体や個人、空手道の歴史等を網羅した「空手道」という本が刊行された。書かれている内容は、各所で私自身が見たり参加したりしており、また大方の登場人物と出会っているのので、実感として身に迫るところがある。

その中に、大塚先生の談話が「明正塾前後」と題して掲載されている。貴重な証言であり以下に原文のまま要旨を抜粋してみる。



船越 義珍

括弧書きは、筆者の補記である。

私が、沖縄県人の学生寮である明正塾へ船越義珍さんを訪ねていったのは、確か大正 11 年（1922 年）の 7 月末頃であったと思う。

私は、早稲田大学を出てから、暫く川崎銀行に勤めていたが、その頃は独立して接骨院を経営していました。私は子供の頃から柔術を修業していたので、友人から琉球唐手術の話聞いて大変興味をもったわけです。私は 6 月に開催された文部省主催の第一回体育展覧会を参観しておりませんから、船越さんの演武も見ていなかったのです。

私が訪ねていった頃は、船越さんは玄関脇の三畳間に住み込んでいました。船越さんという人は子供のような心の持主で実に正直な人でした。

その当時の船越さんの仕事は、朝は配達された新聞を各部屋に配ったり、郵便物を保管したり、身体があくと炊事場の仕事を手伝ったりする毎日でした。既に 55 歳になっていましたから、当時とすれば年寄りだったのです。

私が知っている限りでは、船越さんの東京生活に協力した人は、先ず講道館の嘉納治五郎先生でしょう。

ところで、私が船越さんと会ったとき、船越さんは琉球唐手術の形を十五ほどもってきたと説明しました。つまり平安（五）内畔戦（三）、公相君、十手、慈恩、チントウ、セイシャン、ワンシュウ、バツサイの十五をいうわけです。

私は子供の頃から武術を修業していたので、船越さんの説明を聞いているうちに唐手術に魅力を感じたのです。こうして私の明正塾通いが始まり、十五の形を修得するようになったわけです。

三男の義豪君が上京してきたのは、確か 15 歳の頃です。義豪君が唐手をやるようになったのは、その後上京してきた長男の義英君の後なんです。義英君は父も老齢になったので、義豪君を後継者として育てなければいけないと両方を説得したわけです。そこで義豪君は 1 カ月ほどの予定で沖縄に帰り唐手術を勉強することになったのです。義豪君は三週間ほどで帰京すると、唐手術の指導に乗り出しました。確か真砂町時代（昭和 14 年に豊島区雑司ヶ谷に松濤館道場を建設して移転するまでの数年間、現・文京区真砂町に道場があった）になってからです。

それから、松濤館流の松濤というのは、船越さんの書の号（雅号のこと）なんです。船越さんは書の塾に通って、一生懸命練習しましたから、非常な達筆家になったのです。

次に、本部朝基さんのことですが、本部さんは船越さんよりも早く日本に来ております。しかし大阪にいて会社勤めをしていたのです。上京してきたのは昭和 2 年（1927 年）頃でしょう。船越さんと同年なのですが、体格は船越さんと違って極めて雄偉です。ただ日本語（標準語のこと）があまり上手でなかったですね。

しかし、人柄は実にいいですし、頭も非常にきれいな人でした。実力という点では抜群です。ともかく本部さんは文句なく強い人という印象です。それに本部さんは沖縄

の大名出身ですから汪洋（度量が大きく、ゆったりしていること）でしたね。

船越さんには嘉納治五郎先生という巨大な背景がありましたが、本部さんにはそれがないので、その点からいえば孤独な人なんだったかもしれません。亡くなったのは確か昭和16年（1931年）だったと思います。

摩文仁賢和さんは温厚な人柄で、よく人に慕われました。親切な方です。小西康裕君（前出、神道自然流）は息子さんの賢栄君（1918年～、糸東流第二代宗家）を暫くあずかっていたでしょう。摩文仁さんと最も親しかったのは小西君でしょう。

ともかく唐手術の形を数多く正確に知っていたのは摩文仁さんです。私もいろいろと参考になる話を聞いております。また技術の交換稽古もやっておりますよ。亡くなられたのは講和条約が締結された翌年でしたから昭和27年だと思えます。

沖縄の人達は、戦後占領時代が長かったので大変気の毒でした。それにしても琉球唐手術が空手道となり今日のような盛大を迎えようとは誰も予想ができませんでした。今昔の感にたえませぬね。

私の長い武道生活の中で、悲しい思い出といえば、なんといっても学徒動員で太平洋戦争に出向いていった若者達のことです。その頃、私は東大、明大、立教大、農大、日歯大などの師範をしておりましたから、学業を捨てて続々と戦地に赴いたまま再び帰らぬ若者を沢山知っております。惜命の情とでもいうのでしょうか、有能な若者ほど数多く死んでいったような気がいたします。戦後になってから、武道で心身を鍛えた若者は、崖頭に立っても冷静であったと聞かされております。もちろん死に直面しながら完璧に冷静であり得たとは思いませんが、すくなくとも動揺を抑えていくだけの沈着な心を持っていたであろうことは固く信じていることができます。あの頃の若者は心が透明で実に真摯なんです。あんな素晴らしい若者はもう見当たりませぬね。

私は6歳の年から武術の修業を始め、今は85歳を迎えておりますが、これでも毎朝稽古を続けているのです。こうして元気でいられるのも武道に精進してきたお陰です。だから武道はもっともっと奨励しなければなりませんね。

註：船越の「琉球唐手術の形を十五ほどもってきた」のところで、平安、内畔戦、公相君、十手、慈恩と形名が表記されているが、これら漢字名は昭和13年以降にピンアン、ナイハンチその他から船越が漢字名に変え、呼び方も日本語読みとしたもの。

記載されている形名では、内畔戦（ナイハンチ）は「鉄騎」に、公相君（クーシヤンクー）は「観空」、チントウは「岩鶴」、セイシャンは「半月」、ワンシュウは「燕飛」、バツサイは「抜塞」となる。十手、慈恩も元来はジッテ、ジオンと片仮名で呼んでいた。

（この項、つづく）